



Data

監督・脚本・編集：三上康雄
出演：細田善彦／松平健／目黒祐樹
／水野真紀／若林豪／中原
丈雄／清水紘治／原田龍二
／遠藤久美子／武智健二／
半田健人／木之元亮／須藤
正裕／瀬戸さおり／黒木信
二／鈴木有史／秋月成美／
真木仁／勝亦正／太田聡／
横山恒平／児玉純一／小林
郁大

👁️👁️ みどころ

『宮本武蔵』を私は中学生の時に吉川英治版で読了。また、武蔵の映画は、中村錦之助版が本命だった。その結果、多くの日本人は巖流島の決戦について決まったイメージを持っているが、その真実は？

自らも武術（居合、殺陣等）をする三上康雄監督は、本作で「こだわり抜いたホンモノの武蔵」をスクリーン上に！そのため、刀も真剣に近い模擬刀を！そうすると、本作前半にみる吉岡一門との死闘は？そして、クライマックスにみる小次郎との決闘は？

これがホンモノ。そう言われても、私たちにはそれ自体がわからないが、本作が通説と大きく異なることは間違いなし。好き嫌いは別として、こりゃ必見！もっとも、私が観た時の観客は5人だけだったが・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■本物の武蔵！史実に基づくオリジナルストーリー！□■

私が吉川英治の大衆小説の代表作である『宮本武蔵』を読んだのは中2の頃。その面白さに、まさに血沸き肉躍ったことを今でもハッキリ覚えている。その面白さは、吉川英治の『三国志』を読んだ時と同じだった。同作は、巖流島での佐々木小次郎との決戦をラストのクライマックスとしたうえで、師匠としての沢庵和尚と、恋人としてのお通さんの存在が大きなポイントになっていた。また、映画では内田吐夢監督の『宮本武蔵』（61年）を第1部とする全5部作が有名。そこでは若き日の中村錦之助が、何ともカッコいい宮本武蔵を演じていた。

しかし、「本物」であればあるほど、人は感動します。見ている方々の心を動かそうと思ったら、しんどいこと、危ないこともしないとイケない。」と語る三上康雄監督は、そんな通説を真っ向から否定し、本物でオリジナルな武蔵の映画を作り上げようと考えたらし

い。その結果、自らも武術（居合・殺陣等）を行う彼は約6年かけてオリジナル時代劇『武蔵』を、現代では異例と言える強いこだわりをもって作り上げた。彼が脚本・製作を兼ねた、史実に基づくオリジナルストーリーが展開する本格時代劇たる本作では、佐々木小次郎の年齢を50歳半ばに設定し、若さみなぎる武蔵と円熟の小次郎による巖流島での決闘をクライマックスとして設定している。また主人公の名前も、「史実に基づく」と、吉川英治版における宮本武蔵ではなく、新免武蔵になるようだ。本作の時代は、関ヶ原の合戦（1600年）から4年後の1604年。舞台は京都だ。幼き頃から父親に徹底的に鍛えられた新免武蔵（細田善彦）は、今21歳。彼は今京にいたが、それは何のため？

■□■吉岡家の清十郎、伝七郎、そして亦七郎までも！■□■

吉川英治版でも前半の見どころ（読みどころ）は、武蔵v s 吉岡一門の対決だった。一介の浪人に過ぎない武蔵が、京にある剣術の名門・吉岡家に挑んだのは一体何のため。それは己の名を挙げたい一心からだが、その他にも武蔵の父・無二斎（須藤正裕）はかつて二代目吉岡憲法と3度試合を行い2度勝っていたから、武蔵にとって吉岡は父・無二斎を超えるためにも必ず勝たなければならない相手だった。本作で、武蔵はまず吉岡家の当主清十郎（原田龍二）にちょっとしたルールの際（?）をついて勝利し、続いてホントは清十郎より強いと噂されていた弟の伝七郎（武智健二）も一撃。それによって、もはや武蔵v s 吉岡の闘いは剣術の試合の域を超えてしまい、吉岡にとって武蔵は必ず殺殺しなければならない宿敵に。そのため、清十郎の一人息子・亦七郎（小林郁大）を当主とし、叔父の七左衛門（清水紘治）がその後見人となった一条下り松の決闘は、もはや剣術の試合ではなく吉岡の門弟を何十人も結集しての吉岡家v s 武蔵の決闘になってしまった。しかし、一条下り松の決闘の行方は？

このような武蔵v s 吉岡家の闘いの中で、武蔵が当主の清十郎、その弟の伝七郎のみならず、幼子の亦七郎やその介添人となった叔父の七左衛門まで切り捨てたのは如何なもの。もっとも、数を頼んで武蔵を「生きて帰らせてはならない」としたのは吉岡家の方だから、武蔵としては己の身を守るために二刀流を駆使し命の限り多くの敵を斬りまくったのは仕方ないが、そこで武蔵は一体何を得たの？

■□■佐々木小次郎の登場は？彼の史実は？■□■

吉川英治版では、武蔵の心の成長の過程を詳しく描いていたが、本作ではそれは観客の解釈に委ねている。本作が吉川英治版と大きく違うのは、京都所司代の板倉勝重（中原丈雄）と、彼に親しく接触している九州豊前・細川家の沢村大学（目黒祐樹）、長岡興長（半田健人）の姿が詳しく描かれていること。そして、そこに豊前・佐々木家の再興を願う佐々木小次郎（松平健）が大きく絡んでくることだ。当時武蔵21歳に対して、佐々木小次郎は50歳。越前で富田流を極めた長剣の使い手・佐々木小次郎の能力を高く見込んだ沢村は、小次郎を豊前細川家の剣術指南に迎えようとしたところから、本作中盤では佐々木小次郎についての「史実」が詳しく展開していくことになるが、その内幕はかなり複雑だ。

■□■なぜ豊前で武蔵v s 小次郎の試合が？■□■

2014年のNHK大河ドラマ『軍師官兵衛』で詳しく描かれていたように、秀吉の軍師として竹中半兵衛と共に秀吉に尽くした黒田官兵衛は、かなりの策士。したがって、秀吉が没した後は九州豊前国の中津に収まっていたが、関ヶ原の合戦の行方をにらみながら、場合によれば「俺が天下を！」と狙っていたらしい。そんな黒田官兵衛を含む九州の大名たちが微妙な力関係にある中で互いに権謀術策を巡らしていたのは当然だ。そして、中国地方の尼子家と同じように、豊前の佐々木家は滅亡させられていたが、その血を継ぐ小次郎が佐々木家の再興を願っていたのは当然。しかして、小次郎の剣術の腕と人間性を高く評価した沢村は、豊前近隣の土豪たちを押さえ込むために小次郎を細川家の剣術指南に迎え入れ、小次郎もそれを喜んで受け入れたが、さて、彼が現実にも果たした役割は？

本作では、冒頭の吉岡清十郎 v s 武蔵の試合は京都所司代である板倉勝重主催で行われ、豊前・細川家の沢村と長岡もそれに立ち会っていたが、それはなぜ？また、本作には、武蔵 v s 鎖鎌の達人・宍戸（児玉純一）、武蔵 v s 奥蔵院槍術の達人・道栄の試合も登場する。そして、奥蔵院槍術の試合には、沢村が立ち会っているのがミソだ。つまり、本作では沢村の存在感が際立っている。しかして、豊前細川家のお殿様・細川忠興の御前で武蔵 v s 小次郎の一大イベントを企画し、それを武蔵に申し入れるのも沢村だ。小次郎がこの試合を承諾したのは当然だが、そこで小次郎は「俺が勝ったら・・・」というある「要求」を出したらしい。そんな小次郎を今の沢村は見損なったと評価し、快く思っていないようだ。すると、試合場が瀛流島に設定された武蔵 v s 小次郎の決闘の段取りは・・・？

■□■小次郎戦で武蔵なぜ櫓の木刀を？■□■

自分自身も武術（居合、殺陣等）を行う三上監督の「本作でホンモノを！」の思いはハンパではないため、本作の殺陣には真剣同様の模擬刀を製作して使用したそう。もっとも、ボクシングのノックアウトシーンを見ても、それは一瞬だからテレビで見ているだけでは何が起ったのかわからず、スローモーションを見てやっと納得できることが多い。それと同じように、武蔵 v s 小次郎の試合も一瞬で決まる確率が高いから、できればスローモーションもしくは誰かの解説が欲しいもの。そう思っていると、事前に沢村が小次郎の剣のさばき方を見せてくれるので、サービスが行き届いている。また、武蔵の方も、冒頭から続く吉岡一門との試合では一貫してさまざまな策を立て戦い方を工夫していることがわかるように映像が作られているからそれもありがたい。

しかして、なぜ武蔵は小次郎との試合で、船頭からもらい受けた櫓を削って木刀を作ったの？本作ラストの武蔵 v s 小次郎のメインイベントでは、小舟から降り立った武蔵を小次郎が海岸線に押しとどめようとする作戦がありありとわかる。それは武蔵もわかっていたとみえて、武蔵が右手に持っていた武器は一体ナニ？また、武蔵自身で作った櫓の木刀は背中に背負っていたが、それは一体なぜ？いつ、どのように使うの？そんな本作のクライマックスは、あなた自身の目でしっかりと。 2019（令和元）年11月22日記